

文芸OGネットワーク通信



Vol. 13

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1
文芸OGネットワーク 代表 稲見 和子
発行：2010.9.25

共立女子大学文芸メディア研究室内
Tel/Fax 03-3237-2681
URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei

第8回 文芸サロン講座

5月22日(土)の総会の後、第8回文芸サロン講座が開催された。

文芸学部教授 鈴木国男先生を講師にお迎えして、宝塚歌劇について講演をしていただいた。

その様子を、会員の春山淑子さんに報告していただく。

鈴木国男先生の講義を
お聴きして

春山 淑子

文芸OGネットワークも8年目を迎え、総会の後のお楽しみとして今年には鈴木国男先生による『宝塚歌劇100周年にむけて』というサロン講座が開かれました。宝塚ファン歴37年の私は聴講をとっても楽しみに、資料の並べられた教室で胸を躍らせていました。★イタリア文学・演劇がご専門の鈴木先生が、「何故に宝塚を…」という思いがあったのですが、ギリシャ彫刻のようなお顔でトップを務めた轟ゆうさんに心引かれたとのお話しに、納得いたすと共に宝塚ファンとして先生に親近感を覚えました。★宝塚歌劇では2002年に観客動員数100万人を



ご講演中の鈴木国男先生

会場内の展示の様子



超す『エリザベート』という公演が行われ、その時の高い歌唱力や説得力のある表現は演劇部門で芸術祭賞を受賞する榮譽を得ました。96年も続いている歌劇団ですが、この時を境に大衆演劇の枠を脱し、日本の演劇界でも存在感を示すようになってきたそうです。確かにあの頃はチケットがなかなか手に入りませんでした。朝からチケットセンターに電話をかけ続け、やっと繋がったと思ったら完売のテープが虚しく流れていました。★ところが今はどうでしょう。不況の影響もあり、平日ならばほとんどの公演のチケットが手に入るという状況です。鈴木先生が100周年を迎えられるか危惧をなさるのもよく分かります。

観客の目も肥えていますから、歌劇団の演出家や演技者等の養成も欠かせません。★でも、何故宝塚…。1995年の関西大震災の後、2ヶ月で公演を再開した当時のトップ麻路さきさんは「希望の灯に向かってなら頑張れる。その灯が宝塚だ…」と言ったそうです。疲弊した人々の心を慰め、生きる活力を与える—それが宝塚歌劇の使命かもしれません。★観劇後に友人と、「宝塚を観られる時は幸せな時だね。」と言いながらよく食事をします。平和な時代でも、自分のメンテナンスには宝塚観劇が欠かせない私です。

(S54卒)

平成22年度 総会 開催される

日時：平成22年5月22日(土)

総会・昼食・懇談 11:00~13:15

文芸サロン講座 13:30~15:30

場所：共立女子大学本館314号室

出席者：34名

最初にネットワーク代表、稲見和子氏が挨拶にたち、2003年OGネット立ち上げ以来の活動の概略についてと、今後、多くの若い会員にも気楽に参加してもらえるような会にしていきたいとの抱負を語った。



1. 平成21年度の活動の報告。会報：年2回、会報が発行された。劇芸術資料整理：整理に参加した人数が延べ284名に上り、現在、ポスター関係の整理を始めたところである。共立祭参加：湊一子さん、今野美保子さんの作品を展示。バザーも行った。

文芸サロン講座：文芸学部教授の近藤瑞男先生による「錦絵の中の名優たち」と題する講演が行われたこと、サロン講座の開催は年1回となったことなど。Webページ：Web上で年間のスケジュールがわかるページにしたいとのこと。

2. 会計より、平成21年度収支報告があり、その旨間違いがないことが監査より報告された。

3. 今後の活動についての方針が各部より報告された。特に共立祭参加については会員の間で参加の形を検討する必要があるのではないかとの議論があった。

* * * * *

今を生きる



私は還暦歌姫

水野 悦子

(旧姓、片町)

この3月、無事還暦を迎えた。あつという間だった。英文学研究室で助手を3年勤めた。今や学長の入江先生は赴任されたばかり、春ご退官された高久先生は、アメリカ留学から戻られて間もない頃だった。いかに歳月を重ねたか伺い知れよう。

当時の速川、成田、吉田、中村先生はご逝去され、只々お懐かしさが募る。しかし、朱牟田、外山先生はご高齢ながらもお元気でいらっしゃる。朱牟田先生は85歳迄も40回近く、夏には英国を訪問され、一度は私もお伴をした。リバプールへ



行くと申すと「あんなヒース・クリフのさまよった街なんかおよしなさい」と半ば真顔で反対され、ストラットフォード・アポン・エイボンへ行く時は笑顔で仔細に行き方を教えてくださいました。ケンブリッジへはご一緒したが、先生にとってもお似合いの街だった。

私は4人の子育てをし、2人の孫もいる一介の主婦である。3年前から民生・児童委員を兼ねながら、区の図書館で子供たちに英語本の読み聴かせ他、手遊び歌もやっている。趣味は語学と洋楽を歌うことだ。この二つは思わぬ相乗効果を

もたらし、外国語が上達した。

友人たちが本を上梓したり、個展を開くのに触発されて、還暦記念にCDを作製した。6曲を6ヶ国語で入れている。パソコンをフルに利用して各言語の歌詞の寄せ集めをしたから、私だけのオリジナルのものとなり、紙ジャケットには歌詞カードも載せた。

朱牟田先生はシャンソンがお好きなので、1曲めは迷わず「薔薇色の人生」にした。今年の5月、お見舞いした時、僭越ながらCDを差し上げた。先生はとても喜ばれて、すぐそれを抱かれ、キスマでされた。

何て光栄な私のCDか！「人生を最高に旅せよ」とニーチェは言っている。古希には去年から始めたギター弾き語りCDを作りたいと思っている懲りない自分がいて、いささか恥ずかしい。

(S49院卒、名古屋市在住)

チアリーダー部

チアリーダー部は、現在、大妻女子大学と「FLASHES」というチームを作っている。共立生は5名（部員は15名）だが、その中での活躍は素晴らしい。

準備体操、エアロビクス、柔軟体操、そして本格的なチアの動作（モーション）へと練習は続く。各動作は、ビデオで確認しながら繰り返し体で覚えていく。それが「経験のスポーツ」と言われている由縁である。どんなに暑くてもその集中力が切れることはなく、次の動作を考えながら演技の練習をしていく。1人の気の緩みは事故に繋がる。2005年には、全国で7位という栄誉に輝いた。今回も8月に15名全員で大会に参加した。技術は勿論、笑顔が得点に響いてくる。特に全員の目の輝きで勝敗が決まる。さらにチアは、自分達が楽しんで演技をするだけでなく、

見ている人に元気を与える競技なので、観客との一体化が大事である。又、体で覚える競技だからこそ、後輩に言葉で教えることが難しい。1年から2年と人によって覚える能力も違う。各自の努力も必要である。

他の部の応援以外に、月20日間程、1回に2時間半の練習、そして家では個々に毎日のイメージトレーニング、筋トレ、柔軟体操とかなりハードである。それでも体が続くのは、“若さ”であろうか？羨ましい限りである。

チア部の歴史は、1990年に始まる。チアをしていると、仲間の大切さが良く分かり、仲間との絆も強くなる。今まで先輩から受け継いできたものすべてを後輩へと繋いでいく。そしてこのチームの歴史に自分をも残していくのが使命だと言う。

広場 - ひろば -

山崎裕子さん(S54 卒)のこけし展を訪ねて

◆春とはいえまだ寒さの残る中、一昨年共立祭で作品展示をお願いした、こけし作家、山崎裕子さんとその教室の生徒さん達との合同展を訪ねた。◆共立祭の会場にいらした方は覚えておられるだろうが、山崎さんの作品は、普通思い浮かべるこけしとは少々趣が違い、各々が自由な形をしている。山崎さんに伺ったら、出会った材料との対話からどの様な形がそこから生まれてくるのかが、導かれてくるとのことだ。例えば、木目や節の有り無し、それが目立つ

程のものか、クセが個性を放っているのかで、欠点の様に考えられる節等も反対に作品に成ってみると、その子（山崎さんは御自身の作品のことをその様に愛しんで呼ばれる）の可愛らしく光る個性となるので、それを見つけ出すのも楽しいとおっしゃっていた。◆会場には生徒さん方の力作も展示され、年齢も職業も違う方々の作品は見ていてとても楽しい気分になった。ベテランの大工さん、高齢の婦人、外国の方等々、同じ課題の作品でも色付けや、表情が豊かで飽きることもなかった。まだこけし作りを始めてからそんなに経



練習後、部長の井上洋弥（ひろみ）さんと松原里紗子さん、吉野麻未さんに部への思いを聞いてみた。「自分のすべてを捧げるスポーツであり、とても楽しい。チアに出会えて本当に良かった。さらにチアを通して、精神面、体、考え方が成長した。これからも絆を大切に、チームを愛すること、そしてその中で自分も輝いていたい。」と口を揃えて話してくれたのが印象的だった。挨拶と返事は基本と言うように、帰り際「今日はありがとうございました。」と先に言われてしまった。とても爽やかで素敵だった。

っていないのに、それぞれが素敵な作品に仕上がっていたのには、正直、驚かされた。◆山崎さんの作品で今回目をひいたのは、大きな鳥のこけしで、生き生きとした表情に山崎さんの思いがこもっているのがよく解る見事なものだった。この子は山崎さんの愛鳥で、若鳥のまま、天国へ飛び去ってしまったノア君だ。私もノア君の声（御主人そっくりの声！）を電話越しに聞いていたので余計に強く感じたのかもしれない。◆会場を見守るノア君のもと、2回目を迎えた山崎さんの合同展の報告とする。

川瀬治子 (S52 卒)

プログラムの整理が大体かたづき(年代がわからないために「不明」とくくられてダンボールに残されているものも多いのであるが)、今は大劇場のプログラムを再点検して見やすく置き易くし直している。同時にポスターの整理も始めたところである。というわけで、資料室の大きい机は半分に分けられて、異なる仕事を2グループが同時進行で進めている。

現在のようにインターネットが普及しておらず、また「ぴあ」のような情報誌もなかった我々の学生時代は、研究室の壁に貼られてあったポスターがまずは芸術鑑賞への窓口であったように思う。3号館の2階は文学と演劇、3階にのぼれば、美術展のポスターが外の世界へと誘ってくれていた。文学にも芸

術にも同時に目を向けることができたのは、「文芸学部」のすばらしいところであった、と今しみじみ思うのである。

整理をしていて困るのは、昔のポスターには公演年代が書かれていないということである。文学座や俳優座など大劇団は、節目節目に座史をだしているので追跡調査が可能である。それ以外の小劇団、小公演に関しては、図書館に足を運んで演劇雑誌にあたるか、早稲田大学演劇博物館を検索して調べてみないと分からないのである。これはプログラムに関しても同じであり、この種の追跡作業は楽しくもあるが、資料整理の先はまだまだ遠い、と言わざるをえない。

ご覧いただきたいのは、三島由紀夫の「近代能楽集」〔国立劇場小劇



場、1979(昭和54年)のポスターである。「邯鄲」は串田和美演出、横尾忠則美術、「葵上」は、高橋三千綱演出、藤原新也美術、「道成寺」は、芥川比呂志演出、朝倉摂美術、という組み合わせが当時話題を呼んだ公演であった。

多田久恵(S45卒)

掲 示 板

◎ 共立祭が開催されます

日程： 10月16日(土)、10月17日(日)

場所： 本館 521号室

展示：「宝塚歌劇100周年に向けて」

*今年も、喫茶コーナーを設けますので、ご自由にご歓談ください。皆様のお越しをお待ちしております。

◎ 資料整理へのお誘い

劇芸術に関する資料の整理を行っております。

時間： 毎週火曜日

13時30分～15時30分

場所： 3号館 551号室

* お時間のあるときに、是非ご参加ください。



◎ 編集後記 ◎

例年になくひどい猛暑でしたが、朝晩の空気の中に秋の気配が感じられることとなり、ようやく通信13号をお届けすることができました。原稿をお寄せくださった方々に感謝申し上げます。総会や共立祭のような行事は通信で毎回取り上げますが、何をどうお伝えするか、担当者一同、頭を悩ませるところです。「サークル探訪」や「ひろば」のように担当者が取材をし、原稿を書くこともあり、会報ができるまでの作業はいわば手作りと言えるでしょう。通信技術が発達し、電子書籍の利用も始まる中で、紙の感触は心を落ち着かせるものかもしれません。今号もご覧いただければ幸いです。

(E)